

# 西藏大蔵経諸版の系譜—(1)—

## ——永楽版カンギェルに関して——

上 田 千 年

### 目 次

- I はじめに
- II 永楽版カンギェルの特徴
- III 日本に於ける永楽版カンギェルの研究
  - 〔III—A〕戦前に於ける永楽版カンギェルの研究
  - 〔III—B〕永楽版カンギェル開版に関する質疑
- IV 永楽版カンギェルの研究補足
- V 結語にかえて（永楽版の所在について）

### I は じ め に

1981年、ドイツの H. Eimmer 氏によって西藏大蔵経カンギェルの系譜が明らかにされて以来、西藏大蔵経に関する研究の気運が高まってきた。その後10年の間に、P. Harrison 氏を始めとする、多くの西藏大蔵経カンギェル研究の成果が報告された。更に現在では、幾種類かの西藏大蔵経カンギェル・テンギェルを、電子テキスト化しようとする研究が進められている。

最も新しい木版蔵大蔵経カンギェルは、1934年に開版されたラサ版カンギェルである。ラサ版カンギェルの製作は、ナルタン版カンギェルを中心にし、テンパンマ系の写本カンギェル、デルゲ版カンギェルに基づいてなされたが、その校訂には、Eimmer 氏の系統図によると、東方グループのカンギェル類の中にある北京系カンギェルは、ほとんど加えられていないと考えられている。<sup>1)</sup>

北京系カンギユルは、17世紀開版の康熙版カンギユルが有名であるが、最初の北京系カンギユルは、15世紀の明朝による永楽版カンギユルである。これは、版本として最初に製作されたカンギユルであり、中国での最初の西藏大蔵經の製作と考えられている。

永楽版カンギユルは万曆年間に重刊されたが、それらのカンギユルは、その後の北京系カンギユルの元版になったと考えられている。

永楽版カンギユルの研究は北京系カンギユルの系譜だけでなく、中国チベット間の仏敎交渉史を解明する上でも重要である。

そこで、過去の碩学の成果を検討しつつ、永楽版カンギユルについて再び整理してみたい。

## Ⅱ 永楽版カンギユルの特徴

永楽版カンギユルは、明の永楽帝の勅命によって製作された最初の版本西藏大蔵經である。詳細は後述することにして、ここではその特徴と、西藏大蔵經の系譜の中でどのような位置づけであるのか注目してみたい。

永楽版カンギユルと康熙版カンギユルの内容は、

永楽版カンギユル (1410年)      康熙版カンギユル (1684年～)

秘密部 24帙

秘密部 24 (25) 帙

般若部 24帙

般若部 24帙

華嚴部 6帙

宝積部 6帙

宝積部 6帙

華嚴部 6帙

諸經部 32帙

諸經部 32帙

戒律轄 12帙

戒律部 12帙

目録部 1帙

目録部 1帙

となっている。<sup>2)</sup>

両者は中国に於いて製作されたカンギユルの特徴とみられる配列をとる。密敎部と戒律部の位置は、チベット系のカンギユルには見られない配列である。華嚴部と宝積部の配列を異にするが、両者とも8行建てであり、同じ帙数であ

るから、非常に類似したものといえる。

永楽版カンギュルの最初の印刷は朱刷りで行われたと伝えられているが、康熙版カンギュルの関係者はそのことを意識してか、第1回目から第3回目までを朱刷りで印刷して開版している。

永楽版カンギュル内容や構成自体は、未だ不明であるにせよ、配列、巻数、印刷形式の一致により、永楽版カンギュルは、康熙版カンギュル製作の元版であると十分考えられる。

では、永楽版カンギュルを製作するにあたって、どの西藏大藏經が用いられたのか。

山口瑞鳳氏は、ツェルパ系のカンギュルであると述べている。<sup>3)</sup>

また、H. Eimmer 氏も、永楽版カンギュルの底本はツェルパ系カンギュルとして、西藏大藏經カンギュルの系統図を発表している。<sup>4)</sup>

羽田野氏は、ツェルパ系だけでなくテンパンマ系の写本カンギュルやナルタン写本カンギュルも用いられた可能性を示唆しているが、永楽版カンギュル自体が入手できない現在、確認されていない。

永楽版カンギュルの製作は五台山の番経廠に於いて行われたが、羽田野氏は、番経廠がテンパンマ系カンギュルを所蔵していた可能性を考えて、テンパンマ系のものも含めたのであろう。

現時点では、永楽版カンギュルはツェルパ系カンギュルを元に製作されたものであり、北京系カンギュルの元版と考えられている。

### Ⅲ 日本に於ける永楽版カンギュルの研究

#### 〔Ⅲ—A〕戦前に於ける永楽版カンギュルの研究

永楽版カンギュルは、明治以後の近代仏教学に於いて、古くからその名称が知られている。最初に永楽版カンギュルの名称を紹介したのは、寺本婉雅氏である。

寺本婉雅氏は、『蔵蒙旅日記』に収録されている「西藏一切経総目録序」にこう記している。<sup>5)</sup>

東京帝国大学図書館所蔵ノ部ハ余ガ黄寺ヨリ購求センモノナリ。明太宗ガ

自カラ皇考及ビ皇妣ノ生育ノ報恩ノ為メニ西藏ヨリ原本ヲ寶持シテ印刻発刊セシモノニシテ、永楽八年三月九日附ノ「御製藏經讚」アリ。ソノ後百九十六年ヲ経テ再ビ永楽版ヲ再版セシモノ即チ大明神宗万曆三十三年十二月吉日奉旨重刊印造」ノ序文アリ。此時ハ甘殊爾部ノミニシテ丹殊爾ノ出版ナカリキ。

とあり、その目録の日付は、「明治四十四年春四月」と記してある。それらの西藏大藏經は、寺本氏が明治33年（1900）8月19日北清事変に際して従軍を命じられた時、北京の黃寺で購入したか、清朝の慶親王より寄贈されたものとみられる。<sup>6)</sup>

そしてその目録によると、万曆版カンギュルと、明武宗の正徳三年（1509）の紺紙金泥の写本である般若經、律師戒本經等で総数 293 函であったとある。

これについて、山口瑞鳳氏は、明武宗の正徳三年（1509）の紺紙金泥の写本は、写本カンギュルであり、万曆版カンギュルは朱刷りのものであったと記している。<sup>7)</sup>

万曆版カンギュルは、その目録によって永楽版カンギュルの重刊であることが判明した。この万曆版カンギュルによって、永楽版カンギュルの内容を知ることが可能であった。残念ながらこれらは、大正12年（1923）の関東大震災によって焼失したのである。この間の事情については、大正5年（1916）の泉芳璟氏による「西藏經典目録」の記載が伝えられている。<sup>8)</sup>

その「西藏經典目録」には、前述の紺紙金泥の写本カンギュル 106 冊は、全て所蔵されていたとあるが、万曆版カンギュルに該当するものは、丙類として区分される白紙黒字版本の「御製藏經序及讚」を含む37冊若しくは、乙類として区分される白紙赤字版本の大般若經のみ 2 部27冊、（全14冊の完本 1 部と欠本のある 1 部で総計27冊）である。万曆版カンギュルは完全な形で所蔵されていなかったものと思われる。永楽版カンギュル、また重刊である万曆版カンギュルが、これ以外に日本に将来されたという事実は知られていない。

これ以後、永楽版カンギュルは、幾つかの西藏大藏經研究の論文にその名称が挙げられているが、実際に調査された永楽版カンギュルが、はじめて報告されたのは、酒井紫朗氏の「華北五台山所蔵仏教文献調査概況」であった。

それは、昭和15年(1940)、五台山に於ける各寺院が、どのような大蔵経を所蔵していたのかを、外務省並びに真言宗の依頼によって、酒井氏が現地調査した報告であるが、その中で、永楽版カンギュル2部が確認されている。1部は菩薩頂(菩薩真容院)に、1部は普楽院に所蔵されていたと記している。また酒井氏は、昭和19年(1944)に「喇嘛教の典籍」を発表し、そのはじめに永楽版カンギュルの写真1葉を掲載している。<sup>9)</sup>

酒井氏は、五台山で永楽版カンギュルを実見したが、チベットに於ける永楽版カンギュルの存在を述べたのは、多田等観氏である。彼の著書『チベット』のセラ寺に関する記述の中に、

セラ寺は拉薩の北方約二里、北に山を背負った山懷にある。古その地域一帯に茨の灌木が密生してをったので、この名称を得た。西暦一四一九年同じく宗喀巴の高弟ジャムチェン・チッゼが開いた。この人は宗喀巴の代理となって、北京に赴き、明の永楽太宗のためにラマ教を説いた。太宗はラマ教に厚く帰依し、西藏文大蔵経カンギュール部を開版した。世に永楽版というは、即ちこれである。ジャムチェンは帰藏のときその一部をもたらし、それが今、この寺の什宝となっている。<sup>10)</sup>

以上のように、戦前には、永楽版カンギュルは、チベットに於いてセラ寺に1部、中国に於いて五台山に2部と、3部が確認されている。これに五台山羅娑寺所蔵の重刊である万暦版カンギュル1部を含めると、合計4部の永楽版カンギュルが存在していたことがわかる。

前述のように、寺本婉雅氏によって日本に将来した万暦版カンギュルは完全なものではなかったが、「御製蔵経序及讚」が含まれており、それによって永楽版カンギュルの開版年代や、永楽帝の製作動機が一部であるが判明した。<sup>11)</sup>

### 〔III—B〕永楽版カンギュル開版に関する質疑

戦前の関連文献からみると、永楽版カンギュル開版は疑問の余地はないと考える。

しかし、戦後30年近くたって、完全な永楽版カンギュルが将来されていないために、その開版を疑問視する論文が発表された。昭和49年(1974)の矢崎

正見氏による「永楽版チベット大蔵經の開版について」である。

矢崎氏は、永楽版カンギュルの開版事実に疑わしい幾つかの点があるとし、6ヶ条に区分して羅列している。これら6つの疑点を要約して挙げておく。<sup>12)</sup>

①校刻開版された版本の所在はもとより、その摺本ならびに開版を立証し得る直接的記述を発見できない。

②永楽年間(1403-1424)の明朝は、決して平穏な時期とはいえず、歴大な財力と労力を必要とするチベット大蔵經を開版するほど国力が潤沢であったか。

③開版に協力したと推測出来るチベット僧が発見できない。チベット大蔵經校刻開版ともなれば、これに協力したラマ僧が当然、居た筈であるが、このようなラマ僧を漢文・藏文の資料に見出せない。

④永楽版の摺本がセラ寺に存在するという点に関する疑問。この摺本は、セラ寺の建立者ジャムチェン・チュージェー (Byams chen chos rje) が、中国より将来したものと推測されているが、その根拠は、Jig med の記述のみである。Lam-rim の伝灯者伝には、藏經を取めたという事は記されていない。

⑤ナルタン古版—ツェルパ版—永楽版という系譜に関する疑点。ナルタン版も、ツェルパ版も存在せず、しかもこれらの2つは、1320年代のもの、永楽版は1410年とされているから、約100年の隔たりがある。また、1300年代に鏤刻し、1908年にリタンに於いて焼失したリタン版との関係はどう理解するのか。

⑥康熙版の北京版チベット大蔵經序文中〈bka' 'gyur gyis par yang slar brkos ba'i phan yon chen po ni〉という文章が、永楽版の開版につづくチベット大蔵經開版を意味するという疑点。永楽版が前述の如く1410年代、康熙版は1680年代で、250年以上の隔りが存するとされる点、また漢文にある“重刊”は、必ずしもチベット大蔵經の“重刊”を意味しないと考えられないか。bka'-'gyur」という言葉が11世紀の人であるシャラワチェンポ (Sha ra wa chen po) に関する記述からみても、今日我々が考えるようなチベット大蔵經甘部のみを指すとは限らないと言えないか。

矢崎氏は、以上の疑点を挙げた後、最後にこう記している。

以上、永楽版の開版に関する疑点を挙げたが、永楽版の摺本と立証できるものが、たとえ一枚でも出現すれば、右(前述)の疑点はたちどころに霧

散すべきものであろう。その限りにおいて、現段階における推論を試みた次第である。

この時点で、矢崎氏は、酒井氏が『喇嘛經の典籍』に掲載した永楽版カンギュルの写真一葉を確認しなかったか、或いはその報告を否定していたと考えられる。

矢崎氏が前述の発表をおこなった直後、それら6つの疑点に対する解答が与えられた。

羽田野伯猷氏が、「永楽版チベット藏經おぼえ書き」を発表し、永楽版カンギュルの開版があったとする歴史的事実を明らかにしたからである。

羽田野氏は、酒井氏がおこなった永楽版カンギュルと万暦版カンギュルを実見した実地報告の正当性を弁護し、永楽版カンギュルがどのように建立され、五台山に所蔵されたか、またセラ寺に永楽版カンギュルが請来され安置された経過について説明し、所要に応じて質疑に回答するという目的で記したと述べている。

そこで、羽田野氏による質疑に関する解答を、矢崎氏の6つの疑点に対応させて整理してみたい。

①に対する解答は、酒井氏が五台山でおこなった調査報告と、『喇嘛教の典籍』に掲載された永楽版カンギュルの写真1葉によって既に与えられている。

羽田野氏は、『御製藏經讚』『清涼山志』等に直接的記述があることを指摘した。『御製藏經讚』については、他の疑点の解答にもなるので後述する。

羽田野氏は、『清涼山志』巻三の、

国朝永楽初、勅旨改建大文殊寺 勅賜貝葉靈文、梵文藏經 朱書横列 御製序讚 每帙盛以綿囊、約以錦条 護以蒨毡 並欽造文殊都鍍金像 万暦辛巳間 勅太監友重修。<sup>13)</sup>

という記述を挙げている。

この記述は、酒井氏が報告した「大文殊寺の永楽版カンギュル1部」と一致している。羽田野氏はこの一致によって、酒井氏の報告の正当性が文献上に於いて証明されたとしている。

また、『清涼山志』巻四からも挙げている。

辛巳春 上 候頭及大智法王，如西土求經，得梵藏經歸，勅寿梓於番經廠，先印一藏送臺山菩薩頂供養。<sup>14)</sup>

その記述も、永楽版カンギュルの開版を示したものとして挙げているが、佐藤長氏が、年代に関する誤りを指摘しているため、羽田野氏は「辛巳春」を恵帝の建文3年(1401)とした上での推論としている。

②の疑点についてはこう記してある。

外冠による国家の危機に際して、仏の加護が祈られる。こうした意図から、仏寺・仏像の建立或いは、写經・大藏經の雕刻がおこなわれたことは、歴史へもれわれに教えている。(中略) 明の永楽帝はチベット仏教を崇び、遺術に秀でた尚師を尊重し、仏の加護力を信じた。永楽帝の経歴并に国家的危機意識が帝にあったとすれば、それは仏寺の建立やチベット大藏經開雕への道を択ばしめたと考えてもよいのではなからうか。

また、「潤沢な国力」は西藏大藏經開版に関係しないとして、このように記している。

太宗の一連の仏教事業は、明が国難多忙であったとしても放棄されたり等閑視されたりしたわけではなからう。太宗永楽帝は道術の尚師に最も関心し崇んだ。仏の神通靈威に関心した。(中略) 帝王が王妃チベット仏教の篤信者である場合、むしろ国家の財政をチベット仏教並に、チベット僧が消耗したことがありえた筈である。<sup>15)</sup>

羽田野氏は、矢崎氏がいうような地震や北征といった平穩ではない状況であるからこそ、チベット仏教を信奉していた永楽帝が、国難を乗り越えようとして永楽版カンギュルを製作しようとしたと考えたのであろう。

③については、直接の解答は記されていない。ただし、矢崎氏が根拠として示した『明史』『明実録』について、それらが特定の関心と規準のもとに編集されていることを指摘し、永楽版カンギュルは、正史の記録規準から考えて、記録される可能性が低いことを示している。

したがって、永楽版カンギュルに関する記述が、『明史』『明実録』には記録されていないという根拠だけで、永楽版カンギュルは開版されず、また開版に関連したチベット僧がいないとするのは誤りである。



④については、羽田野氏は、ジャムチェンが、永楽版カンギュルをセラ寺に持ち帰った根拠として、ジクメーナムカー (Jig med nam mkha') の記述以外のチベット文資料を挙げている。プルチョクガワンジャムパ (phur bu lcog ngag dbang byams pa) (1682~1762) が、ポラネーソナムトブギェー (p-ho lha nas bsod nams stobs rgyas) の要請から、1744年に編集した《pad dkar 'phreng ba》である。

その中、セラ寺に関する記述に、ジャムチェンが、永楽版カンギュルをセラ寺に持ち帰った根拠があることを指摘している。

羽田野氏は《pad dkar 'phreng ba》に拠って、ジャムチェンが、大明皇帝より大慈法王の名号と、印誥と、不可思議な賜物を贈られたことを示している。また、このカンギュルについて、《pad dkar 'phreng ba》に、《シナにおいてはじめて刊梓されたカンギュルの同一の版木による刊本を携帯して衛にいたられた。この刊本は表紙を金文字でかいた希有なものであった》という記述があることを示している。<sup>16)</sup>

また、前述の《pad dkar 'phreng ba》の記述は、『明史』卷三百三十一中の、ジャムチェンの記述と一致するとしている。

Lam-rim の伝燈者伝については、論題が限定され叙述も論題に従って限定されたものであるから、それに言及がないからといって、否定の根拠にはならないとしている。

⑤については、ナルタン版カンギュル目録の記述と、前述の『清涼山志』卷四の記述より、ナルタン写本—ツェルパ写本—永楽版カンギュルとする系譜を推定している。

羽田野氏は、前述の『清涼山志』卷四から、候頭と大智法王（智光？）が、チベットから永楽版カンギュルの底本となる写本カンギュルを将来したとして、その中に、ツェルパ系の写本を始めとする多数のテキストが将来した可能性を示唆している。

矢崎氏の述べた〈百年という歳月の隔たり〉については、グーロツァワシュンヌペル ('gos lo tsa' ba gzhon nu dpel) (1392~1481) が、ツェルパ写本を校正して完成したチンワルタクツェ写本の例を挙げて、ツェルパ系カンギ

ユルがツォンカバの時代にも実在していたことを証明している。

以上の例によって、矢崎氏が〈百年という歳月の隔たり〉という理由で、両カンギュルの史的な関係を拒否し、永楽カンギュルを否定することは不当であると述べている。

リタン版の関係に関する解答は、羽田野氏の「チベット大蔵経縁起」の中で、与えられている。

それに拠ると矢崎氏の主張したリタン版の刻刊の年代と製作者が誤りであることが示されている。したがって疑点になり得ないのである。<sup>17)</sup>

⑥について、矢崎氏の康熙版カンギュル目録の解釈に疑問があることを述べている。

質疑者のように漢文大蔵経の北蔵や南蔵に対して番蔵名経、即ちカンギュルがその重刊であるという可能性が〈ことば〉としても成立するかどうか疑問ではなからうか。重刊とはチベットカンギュル、つまり番蔵名経の系列間でなければなるまい。提示された四葉の写真並に史的事実によっても、重刊を首肯しなければなるまい。

四葉の写真は、酒井氏より提供された永楽版カンギュルの『御製蔵経讀』のことであろう。その中に、「遣使往西土、取蔵経之文、刊梓印施」と「万曆三十三年十二月吉日奉旨重刊印造」という記述がある。

それから、“重刊”がカンギュルを指すことは明らかである。また前述の寺本氏の記述とも一致している。したがって「御製蔵経讀」には永楽版カンギュルの記述があり、①の疑点の解答にもなっているとしている。

“bka’-’gyur”の語義に関しては、矢崎氏の自己矛盾を指摘している。<sup>18)</sup>

矢崎氏は、シャラワの記述から、“bka’-’gyur”がカンギュルのみを指すとは限らないとしながら、永楽版カンギュルより古いナルタン写本カンギュルを認めているからである。したがって、矢崎氏の“bka’-’gyur”という語義解釈には矛盾があり疑点になり得ないのである。

以上のように、羽田野氏は矢崎氏の挙げた6つの疑点をすべて解消している。

昭和50年(1975)に羽田野氏は、前述の論文を要約した「永楽刻カンギュルの刊梓」を発表して矢崎氏の解答としている。

羽田野氏はそれらの論文で、歴史的事実から永楽版カンギュルの存在を証明した。その後、新たな実地調査によって永楽版カンギュルの存在が確認された。

昭和55年（1980）酒井紫朗氏の「北京永楽版甘殊爾について」である。その中でチベットに於ける、2部の永楽版カンギュルの存在を報告している。

酒井氏の報告は次の通りである。

セラ寺のツォクチェン堂の後堂に、明の太宗の後賛つまり『御製蔵経讃』が、見本として陳列してあった。それは8行建で朱色であった。

デブン寺のゴマン学堂に、セラ寺と同様に『御製蔵経讃』が朱刷りで示されていた。

その中のセラ寺の報告は、多田野氏が述べた、永楽帝よりジャムチェンがカンギュルを賜ったという前述の記述と一致している。

またこの論文には、「御製蔵経讃」全4葉「御製後序」1葉の写真が掲載されている。

#### Ⅳ 永楽版カンギュルの研究補足

さて前述の研究成果に一部補足を加えたい。

羽田野氏が『清涼山志』巻四の「辛巳春」を建文3年（1401）と推定している。その根拠は、大智法王は智光でありその称号を得ていたからだとしている。

その根拠には疑問がある。明史巻二百九十九には、智光が大智法王という勅号を賜ったとは記されていない。佐藤長氏が述べているように、大智法王は、ジャムチェンの高弟であるパーデンタシー（dpal ldan bkra shis）の称号とすべきである。<sup>19)</sup>

しかし「辛巳春」を建文3年（1401）とする説は支持する。『清涼山志』は辛巳春の記述に続けて「御製蔵経讃」を掲載しているからである。「御製蔵経讃」は永楽版カンギュルの各帙に付けられたものである。また、酒井氏の写真にある「御製蔵経讃」には永楽八年（1410）の年代が記されている。パーデンタシー即ち大智法王がいた年代を示す記述ならば「御製蔵経讃」を掲載する必要がない。したがって天順五年（1461）とは考えられない。

「御製藏經讚」の掲載と、前述の羽田野氏の説や酒井氏の報告から明らかなように、その辛巳春の記述は永楽版カンギェル開版に関するものであり、辛巳春は建文3年(1401)である。

「明史」等には候頭と共に行動したのは智光とある。辛巳春の記述が建文3年(1401)のものと考えられる以上、『清涼山志』の著者鎮澄(1546~1617)が智光を大智法王と誤認したと考えるべきではないか。<sup>20)</sup>

次に、「御製藏經讚」に関して述べたい。それは特定の大藏經を意図して作られたものではないと考えられる。永楽版カンギェルや『北蔵目録』にも同一のものが収録されている。更に内容から「御製藏經讚」が何れの大藏經の讚文なのか特定することができない。

永楽版カンギェルの「御製後序」は『北蔵目録』の「御製藏經後跋讚」と同一の内容を持っているが日付を異にしている。永楽版カンギェルには「永楽八年三月初三日」とあり、『北蔵目録』には「永楽九年閏十二月□日」とある。ある特定のものを意図した讚文が他の目録に収録されたと仮定するならば、日付を含め、すべてが同一であるべきである。「御製藏經讚」は「御製後序」と共に収録されるものである。したがって「御製藏經讚」のみが特定の大藏經を意図することはあり得ない。矢崎氏が「御製藏經讚」を『北蔵目録』のものとするのは誤りである。

永楽版カンギェル開版目的については、羽田野氏は永楽帝がチベット僧を厚遇した例をあげている。それ故永楽帝のチベット仏教信仰が永楽版カンギェルの製作を促したと考えている。果たして永楽帝の仏教信仰のみから、莫大な経費のかかる永楽版カンギェル開版事業が推進できたであろうか。

永楽帝によるチベット僧の厚遇は、チベットに対する懷柔政策であると考えられる。山口瑞鳳氏は、永楽版カンギェルについてこう記している。

明朝がチベットに対して積極的な懷柔政策をとりはじめてチベット仏教界から別々に招いた三人の代表者に法王の称号を授ける折に、引き出物として与えられている。<sup>21)</sup>

永楽帝の北伐が開始されるのは永楽八年(1410)であり、開版と同じ年である。チベット懷柔政策に関連して永楽版カンギェルは製作されたのである。そ

れ故、朱刷りで印刷した上、すべての帙を豪華な装丁のものにする必要があったのではないか。

以上から判断すると永楽版カンギュルの系譜はこのようになる。

永楽版カンギュルは、建文三年(1401)前後の永楽帝の命令によって、候頭と智光がチベットで収集した写本カンギュルなどのチベット仏典を番經廠において編集開版したものである。

その印刻開版は永楽八年(1410)までに終了した。最初の1部は大文殊寺に安置している。勅刊であり民間には流布していない。チベット懐柔政策に利用するために製作したからであった。朱刷り8行建で、「御製藏經讀」が各帙に付けられて、豪華な装丁が施された。チベットに贈ったものには金字の表紙もつけられていたようだ。永楽十一年(1413)に大乘法王に、永楽十四年(1416)大慈法王すなわちジャムチェンチューゼーにそれぞれ1部が贈られた。ジャムチェンはそれをセラ寺に安置した。セラ寺の永楽版カンギュルは、600年経た現在も什宝として保管されている。また万曆三十三年(1605)に開版されたものは永楽版カンギュルの重刊であった。

## V 結語にかえて(永楽版カンギュルの所在)

最後に、永楽版カンギュルの現存に関して知り得たことを記しておく。

中国の永楽版カンギュルの状況は、昭和63年(1988)に、中国佛教協会から水谷幸正氏宛てに送られた書簡に記されている。

永楽版カンギュルの版木はすでに毀損して現存しない。

民俗文化宮図書館には、未整理であるが永楽版カンギュルが所蔵されている。永楽版カンギュルは、五台山の菩薩頂(大文殊寺)及び普樂院のどちらにも現存していない。

ラサのセラ寺、デブン寺については未調査である。

筆者は、平成5年(1993)8月、小野田俊蔵氏引率のチベット旅行団に参加した。その小野田氏と共に、セラ寺のツォクチェン堂の後堂で「ジャムチェンが賜ったカンギュル」を確認している。ただ残念ながら、時間の都合上閲覧で

きず帙数程度の確認だけで終わった。

そこに安置されたカンギュルは、全部で 104 帙あったと記憶している。永楽版カンギュルは 106 帙であり 2 巻不足しているが、仏前に供えられている可能性もあるので、完全な形で保管されているとみてよい。写真①は保管状況である。帙は天井まである棚に隙間なく配置してある。床から 1.5 メートルほどの部分は、金網が貼りめぐらせてあった。各帙の装飾はほとんど傷んでおらず、新たに作り直したのだろう。写真②は、帙の表示を撮影したものである。

〈brgyad stong〉とあるように般若部のものであるが、〈sher phyin〉とは表示されていない。写本の内容に近いカンギュルと推定される。

前述にある「御製蔵経讃」は陳列されていない。確認したカンギュルは、酒井氏の報告と多田氏の記述と一致するから永楽版カンギュルである可能性が極めて高いものといえる。

デブン寺では永楽版カンギュル全体を確認していない。ツォクチェン堂の 2 階には、「御製蔵経讃」はなく別の朱摺りの 8 行建ての版本数葉が陳列されていた。それは康熙版カンギュルと一致しない（写真③）。葉数は、〈dza zhe dgu〉と読み取れる。右側には「明満寂器戒破説罪業大聖經一是□四十九上」とある。〈dza〉表示から判断すると 19 帙以上ある刊本の一部である。それは永楽版カンギュルのものではないか。

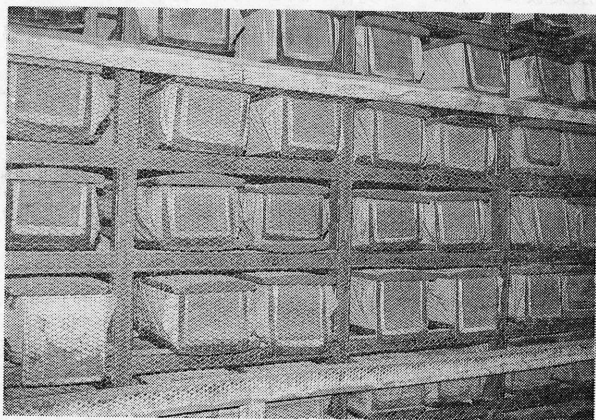


写真 ①



写真 ②

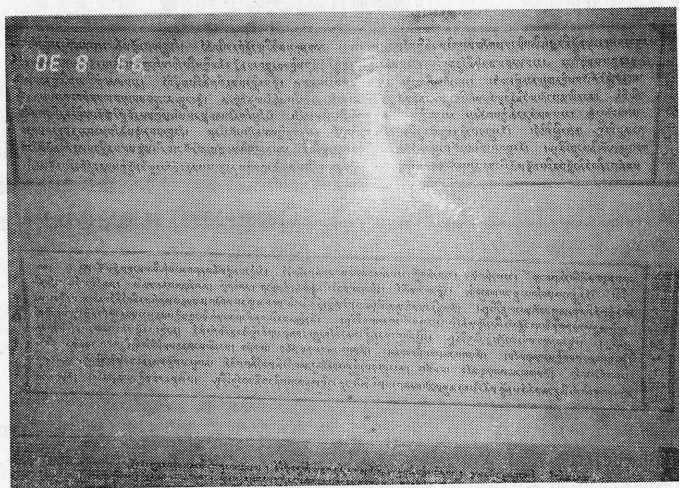


写真 ③

(参考文献)

- 酒井紫朗「華北五台山所蔵仏教文献調査概況」『密教研究』76号, 1940.  
酒井紫朗「北京永楽版甘殊爾について」, 『密教文化』133, 1981.  
佐藤長『中世チベット史研究』, 同朋舎, 1986.  
羽田野伯猷「永楽刻チベット蔵経おぼえ書」, 『密教文化』108, 1974.  
羽田野伯猷「永楽刻チベット・カンギュルの刊梓」, 日本西藏学会会報第21号, 1975.

矢崎正見「永楽版チベット文大蔵經の開版について」, 日本西藏学会会報第20号, 1974.

山口瑞鳳『チベット』上・下東洋叢書 3・4, 東京大学出版会, 1987・1988.

#### 注記

- 1) Helmut Eimmer, Some Results of Recent Kanjur Resarch, *Archiv für zentralasiatische Geschichtsforschung*, Heft 1, 1983. 参照.
- 2) 酒井氏論文「北京永楽版甘殊爾について」より引用。ただし康熙版カンギュルの秘密部の帙数は、後に加えられたプトンのダラニ集 1 帙を除いて 24 帙とした。
- 3) 山口氏『チベット』上, P. 313.
- 4) 注 1 の論文に掲載。
- 5) 寺本婉雅氏, 『蔵蒙旅日記』, 芙蓉書房, 1974. P. 299.
- 6) 山口氏『チベット』上, P. 66.
- 7) 注 6 に同じ。
- 8) 泉芳環『東京帝国大学所蔵西藏經典目録』大谷大学所蔵, 筆写本.
- 10) 酒井紫朗『喇嘛教の典籍』, 真言宗喇嘛教研究所, 1940.
- 11) 多田等観『チベット』, 岩波新書, 1942. P. 13.
- 12) 寺本婉雅氏は、永楽版カンギュルは明の太祖の開版としている。永楽帝は太宗若しくは成祖と呼ばれるべきであり、太祖には該当しない。ただし、「御製蔵經讚」には、上記の名称の記載はなく、大明皇帝とのみある。寺本婉雅氏の指摘通りならば、永楽版の製作は、明の太祖が在位の間（1368～1398）に開始された可能性もでてくるが、永楽版カンギュルを実見しない限り不明である。
- 13) 『清涼山志』, 山西人民出版社, 1989. P. 52.
- 14) 同『清涼山志』 P. 71.
- 15) 《pad dkar 'phreng ba》, *Gedan Sungrab Minyam Gyunphel series* Vol. 13, 1970. 102～108 参照.
- 17) リタン版の開版は、紅帽派のガルワン・チューキワンチュク (sGar dbang chos kyi dbang phyug) (1584～1646) が監修者となっている。矢崎氏がリタン版が 13 世紀の開版と主張するのは誤りである。
- 18) また矢崎氏は“bka'-'gyur”の語義から、大蔵真經つまり“bka'-'gyur chen po”が、南北両蔵を示している可能性があるとして述べる。それは不可能である。『デンカルマ目録』の表題等から明らかであるように、カンギュルとデンギュルは明確に区別されるべきであり、南北両蔵ではない。
- 19) 佐藤氏『中世チベット史研究』 P. 166.
- 20) 佐藤氏『中世チベット史研究』 P. 318.  
『明史』卷二百九十九, 智光の記述参照.



『明史』卷三百三十一，大慈法王伝参照.

21) 山口氏『チベット』下，p. 313.

22) 酒井氏の報告にあるゴマン学堂には，「御製藏経讃」は現存しないようである。

(附記)

この論に関して，小野田俊蔵氏より指導を賜った。泉氏筆写本である『東京帝国大学所蔵西藏經典目録』は，大谷大学大学院の三宅伸一郎氏より提供していただいた。またセラ寺デブン寺で撮影した写真3枚は佛教大学大学院の矢多弘範氏より提供していただいた。ご厚意に感謝いたします。